

12月17-18日開催（於:金沢教会）の運営委員会では、10、11月の災害支援の報告がなされました。内容は(1)「被災地の現状」、(2)「名古屋教区の活動について」でした。次いで、センター長の片岡神父様から今後の活動に関する(3)「提案事項」が示され審議されました。以下簡単に紹介します。

- (1) 石川県内の3自治体は11月22日付で、能登半島地震後に死亡した15人（輪島市6人、能登町5人、穴水町4人）を新たに「災害関連死」と認定。これにより全体で235人となり、熊本地震の222人を超えた。全体の死者数は462人で、災害関連死は直接死の227人を上回った。現在も約200遺族からの申請が出ており審査が進む過程で、今後も増える可能性がある。災害関連死の増加の原因としてはさまざまあるが、とりわけ「避難生活が非常に長期にわたるなど被災者の生活環境の変化が大きく、通常の生活を取り戻すまでに長い時間がかかる」と説明がなされた。また在間文康弁護士は「本格的な冬を前に避難所での寒さへの対策などを徹底」すること、また被災者個人によって「お金や生活、家族、仕事の問題などが組み合わさって」いるので、「行政だけでなく専門家やNPOなどが有機的に連携し、人に合った支援をしていく」ことが肝要である、と指摘している点が紹介された。なお、今日現在の関連死数を聞いたところ、6人増えて241人となったとの回答を得た。9月の豪雨から2か月後の11月26日には石川県で最大震度5弱の地震が起こり、以後震度4～3程度の揺れが毎日のように続いていると報告された。
- (2) 名古屋教区の活動であるが、①活動の人材としては、外国宣教の経験のあるシスターたちがリレー形式で途切れなくパワフルに支援に携わっておられることが報告された。②七尾での支援活動はじんのびカフェ（聖母幼稚園前）、輪島では移動カフェ（二勢団地）が活況を呈しており、そこでは同時に、ハンドマッサージや健康相談も行われ、スタンプカードの発行もしているとのことであった。いずれも地域同士のつながりの強化、引きこもりの防止を目的としているとのことであった。
- (3) 提案事項の中で、片岡師からは、(A)物資運搬支援に配付する2L飲料水ケース、レトルト食品などの手配、(B)被災者に充てたメッセージカード（誰かが自分のことを思ってくれていることが知られるように）の送付（これは今後提案します）、(C)新条件のボランティア活動への参加（ポスター配布済み）が提案されました。

翌日は被災地視察に充てられ、午前7時半に金沢教会を出発して、輪島方面に向かいました。11時半頃に輪島市の曾々木地区に到着しましたが、気温は零度で小雪がちらつき海から吹く風で体感温度は氷点下でした。地震発災直後からボランティア活動をされている佐渡氏から輪島、珠洲での支援の現状と困難さをお聞きしました。輪島市の幹線道路沿いの家屋

は解体処分が進んで更地になったりして街は整備されてきたようですが、奥まった地域は発災後1年も経つのに全く手がついていません。輪島市はまだ28%ほどしか公費解体がなされていないのが現状です。輪島から珠洲を巡ってきましたが、地震に加えて9月の大洪水の被害は甚大で、海岸沿いに並んだ旅館やレストランなどが軒並み襲われ、巨岩が押し潰し、巨木が貫き、外部内部は泥土にまみれ、もはや手をつけられない建物が多くありました。街からは人影が消え、土木作業員の方々とわずかなボランティアの集団が一生懸命に作業していました。山から海に下る激しい鉄砲水に押し流された「海楽荘」の奥さんが必死で松の木につかまり、片手でご主人の手をつかんでいたが、結局力尽き、ご主人は海へと流されていた（のちに遺体で発見された）という話も聞きました。これはほんの一例で、その種の悲劇が数えきれずあったと思います。自然の猛威に対する人間の無力、誰も恨むことができないといった状況でした。片岡神父様と現地スタッフは一人でも多くのボランティアをと切実に訴えていますが、反面、何をどこまでできるのかといった問いと隣り合わせではないか、とその内心の思いを感じてしまいました。しかし被災された方々が助けを求めておられる現実があり、その声を教会はけっして無視することはできません。皆様の支援とお祈りをぜひお願いします。

以上